

諏訪小だより

令和4年1月11日
1月号
多摩市立諏訪小学校
校長 齋藤 幸之介

改めて問いたい「コミュニケーション」のあり方
－3年目を迎える「コロナ禍」での教育を模索しながら－

校長 齋藤幸之介

御来光に映える雪化粧された富士は、新年を迎えた今、私共を未来へ導くがごとく一層はつきりとその姿を示しているように感じられます。

あけましておめでとうございます。旧年中は大変御世話になり、ありがとうございました。

昨年も、新型コロナウイルスに翻弄された1年でした。一度は激減した感染者数ですが、年末には「オミクロン」という変異株が出現し、まだまだ予断は許さない状況です。だからこそ、学校では何をどうすべきなのか、を一層深く考えたいと思っています。

コミュニケーションのあり方

理学博士の山極寿一先生は、御存知の方も多いかと思いますが、ゴリラの生態を御研究されています。ゴリラとサルとの比較を通して人間社会のあり方を述べられるなど、興味深い点が多々あります。

一昨年、学校は長期の臨時休校となり、「オンライン授業」が話題になりました。タブレット端末が導入されたのもこれに大いに関係があることは言うまでもありません。山極先生は、「メールやSNSの情報通信技術を用いれば、かえってコミュニケーションがとりやすくなっているという意見もある」一方で、「言葉でだまされ傷つくことが増えると、言葉で世界を作ってきたはずの人間が、逆に言葉に支配されて苦しんでいるような気がしてくる」と述べられています。先生はまた、野生のゴリラと付き合った経験を挙げられながら、「心を読むのに言葉は要らない」、そして「声や身体の動きで作られる全体的な感触」の重要性をおっしゃっています。

人間だからこそその「コミュニケーション」

山極先生は、現在友達ができないという相談を寄せる大学生が多いことを指摘しています。そして、大学生になるまでに身に付けた、言葉を用いた「読解力」の重要性と共に、「対話する力」の大切さを重視されています。それは、「とっさの修正力を発揮しながら、互いの考えを調整して、新たに考えに行き着こうとする共同作業」が社会を生き抜くために大切だからに他ならないからです。

ゴリラは4歳頃まで授乳が続くが人間はおよそ1～2歳で離乳するので、その分いろいろな人と付き合い、これを通して自分が世界に受け入れられている実感を形成していく必要がある、と山極先生は述

べていらっしゃいます。これが「人間特有の社会性」なのだそうです。だからこそ、コミュニケーション能力が必要な力、となるのです。

大人の役割

山極先生は、教育は「人間の世界にだけ存在する行為」とおっしゃっています。他の動物は、すべてを自分で学ぶのだそうです。そして、教育の本質は「上の世代から下の世代への贈りもの」であり、贈りものですから「正当なお返しなどしなくたっていいものですし、見返りを期待するようなものでもない」とも述べられています。

先生は、教育の最も重要な機会として、「食卓での親子の対話」を挙げていらっしゃいます。子供はここで、「人との関係性の機微や、していいこと・悪いことの区別を具体的に覚えていく」と示されています。私共教職員も、子供たちに関わる一人の大人としてこのことを受け止めるとともに、例えば、つい言葉のみで伝えよう、理解させようとするのが本当に子供たちに受け入れられ、納得されているかを考えなければ、と振り返っています。

山極先生は、「コロナ禍で制約されている身体の触れ合いを情報技術に明け渡してはいけない」とまとめられています。正直、昨夏のような新型コロナウイルス感染症が蔓延した際には、正直叶わないこともある、と明確に示さないとならないでしょう。しかし、一方で、私共は、本来大切にされなければならないことは何かを、例えば今回御提示した「コミュニケーションの大切さ」から考えていく必要がある、と改めて確認をしたところでした。皆様はどうお考えになるでしょうか。

そして、だから今は、ただ新型コロナウイルスがまん延しないことを願うばかりです。

本年もどうぞよろしくお願い申し上げます。

<参考>

山極寿一『言葉に限界 五感生かして』

(「科学季評」 朝日新聞 2021年8月6日朝刊)

桜木建二『新入生に目立つ、人としての準備不足 ゴリラ学の山極寿一京都大学総長』

(「EdcA」 朝日新聞社 2021年6月12日)

桜木建二『問いを立てる訓練がヒトに不可欠な力 養う ゴリラ学の山極寿一京都大学総長が考える「学び」』

(「EdcA」 朝日新聞社 2021年6月22日)